

- ・下村ブーム到来
- ・パールの正体は〇〇
- ・魔法を生むには
仕掛けが必要
- ・続きが待ち遠しい!

下村ブーム到来の予感



下村敦史

デスゲームあり、密室ミステリあり、多重推理(推理合戦のこと)ありという詰め込み過ぎでは?という遊び心溢れる内容。それ以前に面喰らってしまうタイトル。それが、『全員犯人、だけど被害者、しかも探偵』です。でも、そんなことが成立するの???

「さあ、独特の世界へようこそ!」という作者の宣言が聞こえてきそうな始まり方。奇想天外な舞台設定。読み手を惑わす章立て。「現実にはありえないだろ」と分かりつつ引き込まれていきます。

どうせ派手に騙されるのだろうと諦めの予感がしながらも、何度も何度もページを戻って気になる箇所を読み直してしまいます。作者が小出しにする明らかに読者への罫だろ?というヒントをそれでも拾い、あれこれ展開予想や謎解きをしますが、壮大な仕掛けに全てひっくり返されます。そして、全て回収されます。

果たして作者はどうやってこの作品の構想にたどり着いたのか。



登場人物への感情移入を重視する人にはおすすりませんが、筋さえ通ってれば(何でもあり)でいいから強烈なミステリを読みたいという人にも、とてもおすすりです。エントメ小説はここまで進化したのか、と感服すること間違いありません。

極めて大胆

「〇〇館(屋敷)の殺人」のタイトルに弱い。手に取らずにいられない。それは幼い頃に母が自身の読んだミステリ本をあらすじからネタバレまで語って聞かせ、その中に綾辻行人があったからである。閉

鎖された空間内での殺人にひどくドキドキしたものだ。今回おすすりする『天狗屋敷の殺人』は横溝正史へのオマージュで書かれた作品だとの事。独特の雰囲気があるのだろうと期待値が上がる。

ヤンデレな彼女、翠の実家である天狗屋敷を訪れた古賀と何でも屋の樋山。遺産争い、棺から消えた遺体、天狗の毒矢、塔での殺人と次々に謎が襲い掛かる。

自分の思い通りにするために薬を盛るなどキャラを強烈に描く一方で、トリックのダイナミックさも必見だ。実際に現場にいる気持ちになつて想像し、この方法が実演で明かされるとなるとさぞかし驚くだろう。トリックと言うからには、ここまで大胆であつてほしい。

遺産争いが発端なため「犬神家の一族」感が強いのかと思いきや、読み終わってから、あ、作品違いだったのかも気が付くところに、二度やられたと思うのだ。



チー、クワ、ワー!

まずはタイトルにインパクトがありすぎて興味をそそられました。まさかチクワにそんな力が...

トラック運転手として働く男性は、妻と二人暮らし。一人娘は独立し家を出ています。男性はふとしたことからチクワの穴から人を見れば、未来の死に際の姿が見える。呪い殺すことができる気が付きます。そんな「チクワの秘密」を守るためチクワの買い占めに走り、生活も困窮し破滅への道を辿ります。「自分×チクワ」だからこそ発動するとは考えず、誰もができると確信しているのが謎です。

この物語は「チクワに殺された男性の手記」「フリーライターから男性の娘へのインタビュー」「小説の断片」の三つの章で構成されており、インタビューの章で謎が解けた!と見せかけて、最終章でまた迷路に入り込むような不思議な感覚に陥ります。チクワには特に思い入れはありませんが、読んだ後には買いに行きたくなりまし



透明人間になる方法?

「透明になる」とはどういうことか。SFの設定やトリックの一環としていろいろな形で表現されている「不可視」の方法を、実際の科学の発展の歴史に絡めて解説した『透明マンツのつくり方』を紹介したい。

「光」についての研究が進みX線が発明された直後には「何でも透過して見えることができる」と一般大衆の間で勘違いが起り、「不可視化」に関する盛り上がりを経て有名なSF小説『透明人間』が生まれた。荒唐無稽な設定よりも、実際の物理現象から想像しやすく、「もしかしたら」と期待させられる表現の方がより興味をひきやすいのかもしれない。もちろん現在でも完全な形の「透明マンツ」は実現していない。しかし限られた条件下で光学迷彩を発揮するシステムは少しずつ開発されているというのだから科学の発展はすごい。

著者がSFオタクな物理学者なこともあり、巻末には古今の「不可視化」を題材にしたSF小説のリストがまとめられている。科学史を背景に、各時代のSF小説の表現を比較してみるのも面白い。

パールの正体は〇〇

小学生の間でまことしやかに囁かれる都市伝説、「パール怪人」。ニユースでお馴染みの「パールのようなもの」で突然おそいかかってくるという怪人だが、口裂け女のようにはっきりとしたデジタルがあるわけではない。男なのか女なのか、目的も対処法も分からない、謎に包まれた存在である。

『パールの正しい使い方』の主人公は、奔放な父親の都合で転校を繰り返す小学生の礼恩。新しい学校に溶け込むため、カメレオンのように擬態することが得意な少年である。礼恩は転校先で出会う四つの事件の謎と、「靴の中の小石」のような違和感の正体を鮮やかに、時に残酷に解いていく。その背後にはいつも「パール怪人」の都市伝説。不穏な雰囲気がつきまとう連作短編集である。

タイトルから、イヤミスの類かと思ってしまうと、予想は大きく裏切られる。ずっと感じていた違和感と、「パールのようなもの」の正体に気付いたとき、なるほどね！と膝を打った。まさかこのタイトルと表紙でこんなに優しいきもちになれるなんて。読み終わった後に本の帯を外して表紙全体を眺めると、最初とは違った印象をもつ。

特に好きなのは「タイムマシンとカメレオン」。複層的なトリックは

予測不能。読後、切なくてやるせない余韻が心にしみわたる。「靴の中のカメレオン」も良かった。子どもゆえの不自由さの中でもなんとか現実に抗おうとするけなげさ。子どもにとって信じられる大人にならなければ、と思った。

子どもの頃、周囲に擬態して「い子」を演じていた大人にこそ読んでもらいたい。読みすすめるうち、小学生の頃のほろ苦い思い出が懐かしくよみがえった。大胆で緻密な仕掛けが楽しめる新感覚のミステリである。



だつてもう みつけて

しまったんですもの

特別、ホラーは好きではない。

理由は単純、怖いからだ。しかし怖いもの見たさというか、ゾクゾクする話は好きだ。そんな私の絶妙な欲求を満たしてくれるジャンルの本が昨今流行っている。「ノンフィクション風フィクション」などと称され、映画化もされた『変

な家』が有名だろう。今回紹介する『近畿地方のある場所について』も、そのひとつだ。物語は、書き手の友人が行方不明になり、彼の情報を求めているところから始まる。その友人はオカルト系の記事を執筆していたが、心霊現象のいくつか「近畿地方のある場所」に関係していたことから、この場所について調べていた。作中では、この場所にまつわる心霊記事が多数紹介されており、それらを統合していくことでこの物語の真実、そしてこの場所にまつわる秘密に近づいていく仕掛けだ。紹介される心霊記事は手紙や記事の他、インターネット掲示板やブログ、動画サイトでのライブ配信など多岐にわたり、リアリティに富む。そのせいもあって、この場所に何かがあるのか、何が起きているのか気になって仕方がない。もちろん、「近畿地方のある場所」とはどこのか、も含めて。

コミック版では、各心霊記事もコミカライズされているため、無機質さが消え、ホラー色が強め

だ。人物が比較的かわいらしく描かれる反面、それ以外は非常に写実的な絶妙な画風で、言いようのない不気味さがあって素晴らし

込まれているので、気になる真実や秘密が増えて読み応えがある。『近畿地方のある場所について』読了後なら、「おや？」と思える場所も仕込まれており、おすすめです。

実は私は、こういったへななかに得体のしれないモノが社会の死角で蠢いている、ゆっくり近づいてくるタイプの物語が好物だ。日常的に幽霊を見ることのない私のような人間には、例えば夜道や、閉まりきっていない扉、不意に首元を感じる生暖かい風などのほうがよっぽど不気味だ。本作が私のような読者に広まりつつ、最後に仕込まれた(袋とじ)でドキドキするのを願わずにはいられない。ここまで読んでくださってありがとうございます。

あ、そうそう、いくらリアリティがあるからといって「近畿地方のある場所」を実際に調べようとしたらだめですよ。何か呼び寄せてしまうかもしれませんからね。赤いレインコートの女とか。もっとも、もう手遅れだと思います。



行動の先にあるもの

押しつぶされるような圧迫感のあるキケン、そんな状況から逃れようとするシチュエーションが好きだ。物語もノンフィクションも関係なく常に心惹かれる。

怖いことは徹底的に調べたい派なので、魔女狩りにしてもよく読んだ。そして魔女裁判から生還する方法を考えてみたものだ。もちろん、ドラえもんの道具でもなければ難しいのだが、想像せずにはいられなかった。

というわけで、魔女という単語に吸い寄せられ『ウェイワードの魔女たち』を手にとった。一六一九年、一九四二年、二〇一九年の三つの時



系列を併読する仕様になっている。三人の主人公がそれぞれに〈閉じ込められた〉状況にあるオープニングから、思いがけないエンディングへと物語は進む。

魔女裁判のため収監中の暗い牢から解放された人物も含まれる。ドラえもんの道具もなしに、それを可能にしたのは何か？

三人に共通するのは〈ここではないどこか〉にいたいという強い希望、打開するために知識や情報を貪欲に得ること、怖れながらも踏み出す行動、そして攻撃しない態度。周囲の悪い状況やその環境をつくる人物を攻撃せず、自分の行動を選び続ける。明るい場所へ、自由な居場所へ、安心な時間へ至る道を探し続ける三人だ。

号泣するような感動はない。三人三様の物語が重みを増すのが心地よく、三人のつながりも明らかになる。閉塞感のある発端からは予想できなかつた爽やかな結末まで、何か善なることがおこつたと、しみじみするような読後感だった。⑩

魔法を生むには 仕掛けが必要なのです



小泉今日子に対してどんなイメージをお持ちだろうか。十六歳で歌手デビューしてから四十年余り、世代によって印象は大きく変わるだろう。『別冊太陽 小泉今日子』として、今日のわたし』をめぐれば、初期アイドル時代に始まり、いろんなクリエイターと組んで面白くて尖つたことを連発しながら時代のアイコンとなつていく様、本を書いたり作詞したり新聞書評子を務めたりといった文学的な側面、ドラマ・映画での活躍から舞台へと軸足を移していく俳優の数々、そして自らがプロデューサーし製作する側になつた現在まで、その長い長い活動が見渡せる。

個人的には和田誠監督の映画「快盗ルビイ」の留美役が印象深い。気が弱く頼まれると断りきれない役どころの真田広之に無茶振りし、「お願い」と懇願するときの可愛さと言つたら、主題歌は大瀧詠一の作

編曲（弦と管は服部克久）、脚韻を踏んだ洒落な詞は監督ご自身の手になる。私にとっては神様同士が組んだようなもので、後光が差す眩い一曲だ。

マルチな才能を發揮し続けるキョんキョんの原点となる音楽活動を、楽曲解説・時代背景・担当ディレクターの証言を交えながら時系列で見えていく好著が『小泉今日子の音楽』。聖子・明菜の後塵をいち早くすり抜けて独自色を出し、時代の頂点を極めていく過程には様々な仕掛けがあつた。既存のアイドル路線からの決別を宣言するかのよう

にバッサリ髪を切つたところへ、新ディレクター田村充義が登場。以後このタグで革命を起こしていくことになるのだが、最初の変化の一曲「まつ赤な女の子」を本書をもとに見てみよう。

アイドルの変わり目にこの人あり、筒美京平への楽曲初発注、詞は新進の秋元康・康珍化の二人に競わせ（軍配は康）、編曲には筒美の指名で佐久間正英が起用され、アイドルソングにテクノポップを持ち込んだ先駆けとなつた。機材ではデジタルシンセをいち早く導入。未知の音色が奏でられた。結果オリコンは前作の一〇位から八位、売上枚数一四・一万枚から二二・七万枚に飛躍した。

作曲、作詞が楽曲にとって重要なのは当然だが、編曲もまた然り。『編

曲の美学』を上梓した山川恵津子曰く「ポップミュージックには、皆さんの楽器がなつていく。その音のすべてを考えていくのがアレンジヤーの仕事」。何はなくともイントロ！どのコードで主旋律を鳴らす？AメロくBメロくサビ各パート前の仕掛けは？間奏は？大サビは必要？ウワモノは弦か管か？コーラス入れる？エンディングは？文字通りすべて考えるのだ。「作曲の何十倍何百倍も労力がかかる、と作曲もする私は思う」。最盛期には年間三百曲を編曲する毎日が五年続いたというから驚く。

本書冒頭に最も大変だつた五九時間（全く寝ずに働いた最長記録）のエピソードがある。詳しくはお読み頂きたいが、その楽曲とは小泉今日子の「100%男女交際」。オリコン二位。山川は日本レコード大賞編曲賞を受賞した。⑪



方法は見つける。 なければ作る。

食べることにほとんど興味がない。これさえ口にしていれば大病しないものがあるのなら毎日、そののみを食したい。生きるために食事するのみであつて、食の楽しみはさしてない。長い行列に並んで名店の至極の料理を食すよりも、並ばなくてよいチェーン店でいい。調理する時間があるのなら、一ページでも本を読まねばならない。

食事はどうでもいいと言つておきながら、食文化には大層興味がある。『台所に敗戦はなかつた』は明治から戦後二十年ほどまでのレシピをもとに編む食文化史だ。著者が当時のレシピを再現・実食ルポまでしているのだから恐れ入る。

戦前―戦中―戦後の台所事情を探るわけだが、例えば戦後。すいとんやサツマイモばかりを食べていたという話が広まるが、これらの話の主語は料理をしない男たち。母たちは食料不足だろうとも、子どもにひもじい思いはさせられない。食料がないなら工夫が必要だ。この頃のおっかさんたちは、毎食に様々な仕掛けを施していた。

小麦粉はないが乾麺ならばあるという時代では、乾麺うどんからビスケット・プリン・コロッセを作つ

ていた。パンはあるけど米が足りない時には、サンドイッチを弁当として持っていくのだが挟むものがない。挟めるものを挟む。味噌・漬物・塩辛……。西洋料理が独自の和食に変わる瞬間である。著者曰く「奈良漬けサンド」は絶品との由。スイーツも当たり前の材料では食べることができない。山芋でホットケーキ・里芋でおはぎ。小豆がないので汁粉は小麦粉で。

現代でこそ家庭料理は女性のやるものではなくてきてきているが、当時は完全に女性の仕事。そのような価値観を強制する国家の政治性も垣間見える。食文化史でありながら同時代の女性史でもある。食事を摂るよりも、食についての本を読むほうが、私にとって栄養価が高そうな代物となるのだった。

カケオくん



39

映画「箱男」がついに公開。
石井岳龍の宿願27年前に一度頓挫していたが安部公房生誕百年に遂に実現。



安部公房

それにしては、動く箱男が見られる日が来るとは。コンニャコナー ARGON ARGON
永瀬正敏と浅野忠信がボロボロかぶって戦つたなんてヤバすぎる。

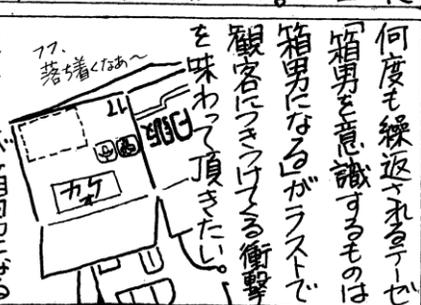


生田前公房は石井監督に「娯楽映画にしてほしい」と注文されたそうだが、それは見事に叶えられた。白本彩奈が選ばれ、原作をアップデートする存在感を示す。



白本彩奈

何度も繰返されたい「箱男」を意識するものは箱男になるがラストで観客にフィナーレを衝撃を味わって頂きたい。カケオくんが箱男になる日も近い? つづく



続きが待ち遠しい

レイチェルシリーズ!!



一九三〇年代の英国が舞台で、探偵レイチェル・サヴァナクが主人公のシリーズ二作目『モルグ館の客人』はサスペンス色が強かった前作とは変わって、謎解きミステリ要素が強く読み応えがあった。

とある殺人事件の裁判から物語は進んでいく。容疑者は無罪判決となるが、犯罪学者のレオノーラや、もう一人の主人公と言える新聞記者ジェイコブなどが物語に加わりまた別の事件が語られていく。前半部分は、話の全体像があまりにもつかめず、謎が増えていき困惑した。しかし、前作と同じく事件に巻き込まれ体質なジェイコブの危うい取材がアクセントとなり、ハラハラしながらも、凡人として描かれる彼の立ち回りに楽しませてもらった。

タイトルにある「館」は何と三〇ページ捲つてもその場面が描かれず、読んでいてじれったさがあった。すでに無罪判決が出た別々の三つの事件が、後半で関係してくることで物語に一気に引き込まれた。無罪となった容疑者たち三人とレイチェルが同じ場所に集結する最終局面は、これから何が起るのか分からないわくわく感が止

が止まらなかつた。

巻末には七ペーじもの「手がかり探し」があり、私はその存在に読後に気付いたが、後からいくつかの答え合わせができて楽しかった。シリーズの続編がいくつか出ており邦訳待ちとのこと、もうすでに続きが待ちきれない中毒性のあるシリーズだ。



セツさん気分を

味わう

今夏、市民プラザで開催された

「95歳セツの新聞ちぎり絵原画展」に行ってきた。九十歳から始めたセツさんのちぎり絵を店頭の画集やポストカードブックで見て、ずっと気になっていた。作品の制作年月日も表示されていて、始めたばかりの頃のたい焼きからすでにセツさんの作品のすこみがあった。合わせて本人の作品への一口コメントや製作の様子の動画も見ることができたのも良かった。

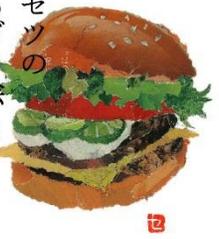
新聞のカラー印刷部分を色分けでストックし、そこから題材にあわせて、色出しがうまく出来ればほぼ半分以上完成に近づいているようだった。

セツさんのように作ってみたいけれど、新聞のストックはできていないので、モチーフ一六種に合わせたカラフルな一五種のちぎれるシールのシートが付いている『シールでかんたん!アート脳ちぎり絵』をやってみた。(四歳から楽しめるようにかわいいモチーフが多め)

ちぎり絵ブックは指先も色彩感覚、想像力、集中力も養えるよう自然と仕掛けられているものなので、老若男女すべての世代にプレゼントしても、嫌味がないもの。思った以上に無心に楽しめるので、やっぱりセツさんのようなブルッコリーを新聞で作ってみたいになった。



90歳セツの新聞ちぎり絵 木村セツ



118